

自伝的記憶はどのように形成されるのか*?

—ライフイベント研究からのアプローチ—

高橋 正 樹

概 要

人の意識や行動様式を規定するのは、属性や置かれた環境だけではなく、個々人の出来事の実験とその積み重ねとしての人生経験である。しかし、量的な調査において、ライフストーリーに代表される質的調査が主導してきたこうした視点を欠きがちであった。本論文では、量的な手法を活かしつつ、この人生経験をとらえる手法としてライフイベント研究をとりあげた。個々の出来事経験はモノのように記憶の中で出し入れされたりするような固定されたものではなく、記憶化される中で変容していく動的な特徴をもつ。自伝的記憶のこうした特徴を、その形成過程にまで視野を広げて実際の調査データを基に考察した。分析において、より影響力の強い出来事経験と出来事経験への感度という視点を提起し、自伝的記憶形成モデルとして、職業・仕事を軸としたモデルと（男性に多い）、家族の出来事への配慮を軸としたモデル（女性に多い）をとらえた。

キーワード

人生経験の研究、自伝的記憶、ライフイベント、記憶の持続と置き換わり、出来事経験への感度

I. 序：自伝的記憶の形成を問う意義

I-1 本稿の課題

本稿の問題意識は、「自伝的記憶」を個人の人生経験を理解するアプローチの一つとしてとらえ、その視点の可能性を考えることにある。具体的には、あるライフイベント調査

* 本稿の掲載に際しては、2名のレフェリーによる審査を受け、貴重なご指稿とコメントをいただいた。ここに記して謝意を表したい。

でのデータを手掛かりに、自伝的記憶の様相およびその形成がどのようなものであるのかについての定量的な把握を試みる。こうした心的状態の分析と考察については、従来は質的なアプローチが主流であったが、近年のライフイベントについての調査研究の積み重ねを踏まえ、どのような量的な記述が可能なのかを模索する。

人の意識や行動を考察する場合、特に定量的な手法では、その人の社会的属性や置かれた状況を独立変数とした分析が主となる。しかし、特に困難な状況に置かれた時などを考えてみた場合、その人がどのような対処を試みるのか、どのような立ち直りの過程を経るのかは、その人の人生経験に依る影響が小さくない。例えば、再び困難な状況に置かれた場合、そうした経験の有無は大きな差をもたらすであろう。なぜならば、その人の人格や人生を作りあげるのは、その人の属性や置かれた環境だけではなく、過去における出来事の経験及びそれにどう対処したのか、そしてそれらがどのように記憶されているのかまで含めた人生経験だからである。自伝的記憶とは、この経験の重みを理解するときに有効な視点と考えられる。

出来事経験とは、単に客観的な事実としての出来事の有無だけでも、単なる刺激（＝出来事）→反応（＝心的状態）でもない。その後の「対処」による影響を受けつつ、記憶化され、その位置づけが変容しうるのである。それゆえ、どのように自伝的記憶として形成され、その形成にどのような枠組みが見られるのかを理解していく必要がある。自伝的記憶とは、全ての人にとって予め共通のものが決まっているわけでも、全く個人ばらばらというわけでもないのである。

I-2 自伝的記憶とは何か？——その人生経験研究の位置と広がり

自伝的記憶とは、認知心理学上の用語法であり「その人がこれまでの人生で経験してきたさまざまな出来事に関する記憶」と定義され、いわゆるエピソード記憶の中でも自己と密接に関連しているもの、とされている [佐藤 2001: 15]。しかし、今まで経験し記憶されてきたあらゆる全てのことを考察の対象に含めることは分析の実践上不可能に近いし、現実的ではない。本稿では、本人に大きな影響を与えた（もしくは本人にそう意識されている）出来事経験の記憶、と限定して考える。もちろん、「大きな影響」を与えた訳ではないにしても、ささやかなことでも「忘れられない」出来事は沢山あるだろう。そもそも「自伝的記憶」ということばづかいそのものに「自伝に含めるような重要な出来事」(佐藤 [2001: 23] が調査で実際に使った言い回し) といった限定的な意味合いあり、本稿でもこの当人の主観的な位置づけに注目した。

こうした人生の出来事経験については、多様な学問領域から関心が持たれ、様々なアプ

ローチが試みられてきた。それは何より、「個人」を個人たらしめているのは、どのような出来事に出会ったのか、その出来事をどのように認識しどのように対処したのか、そしてその出来事をどのように記憶したのか、といった出来事経験の積み重ねによると考えられているからである。

例えば、ライフヒストリーの意義を提唱した中野卓は、以下のように述べる。

変化する状況に対処する個人が示す対処の仕方の多様さは、その人の、それまでの人生を知ることにより初めて説明しうる面が多分にあるのではないのでしょうか。その人が、その時現在において示す個人的選択は、単にその時現在において彼を規定している諸条件だけからは説明しうるものではなく、その人の社会的人格形成を規定してきた、これまでの彼自身の生活世界の展開がどうであったかによって、しばしば理由付けが可能となるでしょう。[中野 1981：6]

また、ライフヒストリーと同様に「個人の歴史」に注目したアプローチにライフコース研究がある。出来事経験の配列や組み合わせといった、より客観的で量的に比較可能なかたちでの把握を試みている。いわば履歴書の研究である。しかし、個別具体的な個人の理解に焦点をあてるライフヒストリーに対し、ライフコース研究は以下の指摘に見るように社会の説明に関心の重心を置いている。

ライフコースとは、社会構造の一つの要素であり、それは個人の行為、組織的過程、そして制度的・歴史的諸力の所産である。ライフコースは、個人の伝記物語ではなく、社会的にパターン化された軌道なのである。[正岡 1996：201]

同じように「個人の歴史」に注目しつつも、両者の関心やとらえ方は対極的である。個人の歴史を構成する人生上の出来事経験とは、個人を個人たらしめていると同時に、外的に記録・観察可能であり個体間の比較が可能になるからである。こうした出来事経験の二面性が、人生の研究に対して対極的な方法を要請するのでもある。¹⁾

こうした個人の歴史への注目に対し、出来事経験そのものを一つの単位として扱うライフイベント研究がある。ライフイベントとは、人生研究の最大公約数的な単位として、以上の両極の関心の接点になりうる。量的にデータが収集・分析できる一方で、個々の差を把握することも可能となる。すなわち、大まかな傾向を捉えるという量的手法の強味を活かしながら、個別の経験そのものの重みを読みとる、という課題に取り組めるのである。本稿での試みは、必ずしもオーソドックスなライフイベント研究と同一のものではないが、出来事がどう経験され、どう認識され、どう対処され、どう記憶されたのか、といったことに注目する視点は同じである。

1) ちなみに、ライフコース研究の古典とされるハレーブ [2001] の試みは、実はライフコース分析にとどまるものではない。ライフヒストリーの聴き取りなどにより広がりを見せている。

I-3 ライフイベント研究と本稿の調査データについて

現在のライフイベント研究は心理学を中心に導入されており、日本では老年期研究を中心に具体的な調査データの蓄積と共に展開されている（簡単ではあるが[高橋・岸野 2001: 48]と[高橋 2002]でそのレビューを行っている）。その共通の出発点は「ストレスフルなライフイベントは人に身体的、心理的な影響を与える」[下仲ほか 1995: 41]という考えにある。但し、本稿で扱うライフイベント調査では（岸野洋久氏により東京大学教養学部の講義の一環として目黒区で実施された一連の質問紙調査（1995～98年）の、1997年と1998年とのそれぞれ一部に加えられていたもの）、オーソドックスなライフイベント研究とはやや異なった質問法を試みた。

各年の質問紙調査のテーマと回収率は以下のとおりである。

○1997年「都市の家族・コミュニティと福祉社会」 対象：30歳以上成年男女，計画サンプル：1000，回収率：58%

○1998年「これからの高齢化社会のためのアンケート」 対象：50歳以上成年男女，計画サンプル：1000，回収率：65%

（いずれも留置法で選挙人名簿からの無作為抽出による。なお、引越しや移転といった不能票を除いておらず実際の回収率はそれぞれもう少し高くなる。以下、「97年調査」「98年調査」と略称する）²⁾

各年度のライフイベントについての質問形式は以下のとおりであり、それぞれ異なっている。

▽97年調査

「これまでの人生のできごとを、あなたがどう受け止めてきたか、伺います」として、「あなたにとって最も大きな影響を与えたできごと（2つまで）」を自由回答で記入してもらい、「経験時の年齢」及び「そのできごとによる影響」を「精神面・経済面・家族関係」に分けて、それぞれ「豊かになった」「辛くなった」「変化はない」を選択してもらった。さらに、「その後の変化と変化のきっかけ」についても自由回答形式で記入してもらった。この設問の回答は全回答者の約8割である。

2) なお、調査結果全体の報告については、各年度概要が作られて回答者を含め関係者に配布された。1997年度には社会調査実習と合わせた報告書が作成された（東京大学教養学部相関社会科学研究室『東京都目黒区におけるコミュニティと福祉社会』1998年2月）。調査成果の一部は、[岸野 1999]で紹介されているほか、1997年度のライフイベント調査のデータを元にした分析と考察に[高橋・岸野 2001]、[高橋 2002]がある。なお、ライフイベントに関わるデータについては、2002年8月に高橋が改めて入力ミスや未入力分など再集計や再コーディングを行っており、先行する発表と集計値が若干異なっている。しかし、全体の傾向は変わらない。

▽ 98年調査

「最近一年間で、あなたにとって一番良かった／悪かった出来事は何でしたか。」と「良かった」「悪かった」に分けて自由回答形式で記入してもらった。また、日常における心的状態との関連を把握するために、日常生活における抑鬱感情を計測する「CES-D」(= Center for Epidemiological Studies Depression Scale) と呼ばれる指標を簡略化して使用し、その一貫性にもとづいて得点を与えた ([Radloff, 1977] [矢富ほか 1993: 37] など)。

通常、ライフイベントの調査にあたっては、忘却や本人の主観による影響をできるだけ受けないように、想定される出来事のリストを作成して提示し、回顧期間も短く限定される。この調査で自由回答方式を採用したのは、長大なイベントリストに回答することの被調査者の負担を軽減すると同時に、敢えてより主観的な部分を取り込む意図があった。個々人が経験したイベント数の把握は出来ないが、イベントリストそのものによる制約を避け、個々の表現の仕方や回顧されることそのものの意味を重視した。分析にあたっては、それぞれアフターコーディングによって分類整理した。98年調査では「一年間」と回顧期間を限定したが、97年調査では限定を設けなかった。その人に大きく影響を与えたような出来事経験は、期限を区切った聞き方で把握するのはむずかしいと考えたからである。

それぞれの調査は「自伝的記憶」とは別の問題意識から設計され、分析にあたって限界もある。ただ、97年調査のデータは、そのまま「自伝的記憶」とみなすことができる(佐藤 [2001: 18] でも同様の聞き方を試みている)。ただ、数が二つと限られているので、「主たるもの」とされるべきだろう。98年調査のデータは、経験時に近い出来事経験の回答であり、必ずしも自伝的記憶とはいえない。しかし、それは自伝的記憶の「候補」とみなすことができる。すなわち、97年調査と98年調査とのデータを対照させることで、自伝的記憶の形成についての手掛かりを得ることができるのである。他に、兩年の対象年代も異なっているなど制約はあるにしても、複雑な人生の出来事経験をおおまかにつかむことを目的とする本稿にあっては特に問題は無いと考える。

I-4 本稿の構成と自伝的記憶へのアプローチ

本稿の構成について、具体的にどのような視点でデータを扱いながら自伝的記憶の様相と形成についてアプローチするのかを以下にまとめる。

「自伝的記憶とはどのような出来事なのか？」という点について、97年調査において回答された出来事を整理することでその大まかな見取り図が把握できる。但し、回答は「二つまで」なので、自伝的記憶の中でもかなり「強い思い出」に限られることになる。

また、これは「現在」という瞬間で聞いた質問であり、年齢によって回答される出来事は変わりうる。出来事経験それぞれの「現在年齢」と「経験年齢」との対比（97年調査）からは、それぞれの出来事についての記憶がどの程度持続してきたものなのか、ということが年数（現在年齢－経験年齢）で量的に把握される。これを同種の出来事について集合的に見ることで、その出来事経験がどの程度持続しうるものなのか、が推測できる（以上、II・1）。また、年代別に集計することで、この出来事経験についての「強い思い出」は加齢とともにどのように置き換わりうるのかが、よりこまやかに把握できる（II・2）。但し、以上の様相の把握からだけでは、自伝的記憶を形成するのは、出来事経験そのものの持つ影響力なのか、それとも出来事への主体の認知や影響のされやすさ（ここでは「出来事への感度」と呼ぶ）なのかは分からない。両者は相互作用の関係にあるにしても、自伝的記憶形成の枠組みについて理解するには、この二つは基本的な視点となる。

98年調査のデータとの対比で、「どのような出来事が自伝的記憶になりうるのか」が推測可能になる（但し、対象年代が異なるので、扱える出来事は限定される）。同時に、抑うつ程度得点（「CES-D」得点のこと）を、出来事経験の精神面への影響の代理指標と見做すことで、より経験時に近い個々の出来事経験への感度（の差）が明らかに出来る³⁾。（II・3）

以上のような手掛かりから、自伝的記憶の様相と形成についての考察を加える。この時、男女における共通性や差異を通してどのようなタイプがありうるのか、といった把握が中心になる。しかし、ここで男女差を見るのは、あくまでも現状において男女それぞれに多いタイプ（類型）を把握することにある。

II. 分析と考察

II-1 自伝的記憶の様相——「自伝的記憶とはどのような出来事なのか？」

自伝的記憶とはどのような出来事なのか。97年調査で具体的に回想された出来事の上位を挙げたのが、図1abである。

「(本人の)結婚」や「子の誕生」「親の死」「子の結婚」など、人生において多くの人が出会い得る節目となる出来事が男女共通して挙げられている。その一方で「職業・仕事」については男性に多く、対照的に「住居・移動」は女性に多い。男性にとっての「職業・仕事」経験（例えば転勤）が、同じ家族である「妻」には、「移動」として経験されること

3) 97年調査でも、出来事の「その時」の影響力を多面的にとらえることを試みているが、回答時の回顧的な評価が入り込まざるを得ないので、ここでは98年調査のデータを用いた。

図1a 大きな影響を与えた出来事の上位 (男性) n= 195

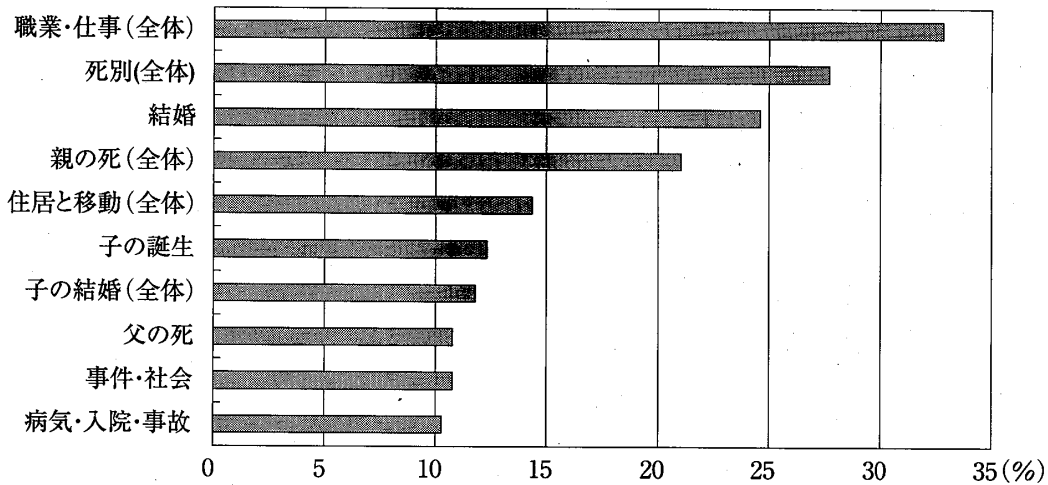
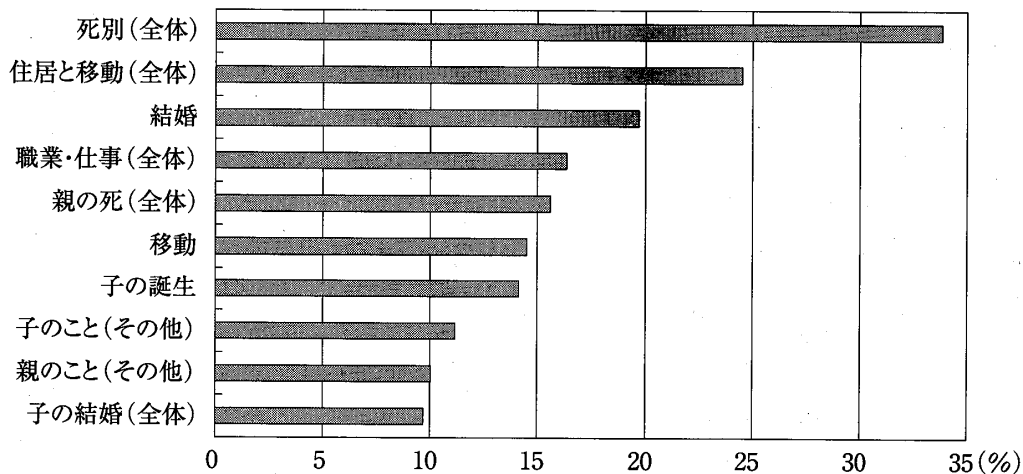


図1b 大きな影響を与えた出来事の上位 (女性) n= 269



がありうることを考えれば、同じ出来事を別側面で経験することも考えられる。また、「親のこと」(死別以外)、「子のこと」(誕生や結婚以外)が女性では上位にあがってくる。上位にはないが、「配偶者の死」(男性4%<女性7%)「配偶者のこと」(男性2%<女性9%) (死以外の全て)も同様である。全体的に女性のほうが、家族の出来事について回答する傾向が強い。

「職業・仕事」や「配偶者の死」については、現状において就業率や平均寿命の差を考慮に入れた場合、その経験率そのものに男女差があることが指摘できる。しかし、「子のこと」や「配偶者のこと」については、どのような出来事もその「候補」になり得ることを考えれば経験率の差があるとは考えにくい。ここからは、男性よりも女性のほうが家族構成員の出来事に対して感度が高いことが想定できる。

以上で見た「自伝的記憶」は、それぞれ現在年齢が異なる者の回答を単純集計したものであり、「現在」という瞬間で切り取った記憶に過ぎない。それでは、それぞれの記憶は、

どれだけ「強い思い出」として続くものなのだろうか。持続年数の横断データを、軸に現在年齢を縦軸に経験年齢をとった散布図の作成により集積させて、この持続を推測してみる。この場合、「現在年齢＝経験年齢」の斜線に近い点は、経験して間も無い出来事であることを表し、離れている点は長い期間を経てなお強い思い出として記憶されている出来事であることを意味している。例えばある出来事の分布が、斜線から離れ帯状に横広がりであれば、ある限られた年齢幅で経験され長期にわたって強い思い出として記憶されることになる。逆に、この斜線に集中していれば、回答が多かったとしても強い思い出としての持続は限られたものであることが推測される。

「結婚」という出来事について、男女それぞれで見たのが図2abである。それぞれ、帯状に横に広がり（良き）強い思い出として持続しうるものであることが良く把握できる。同じく回答の多い「親の死」について見たのが図3abである。経験年齢に幅があるだけでなく男女差が見られる。だいたい30歳以下の若い時期に「親の死」に遭遇した場合、（辛い）強い思い出として男女共に持続する出来事経験となる。これに対し、中高年期以降に出会った場合、女性の場合は強い思い出として持続しうるのに比べ、男性の場合はそうでもないことが読みとれる。⁴⁾

図2a 思い出の持続 結婚 男性 n=49

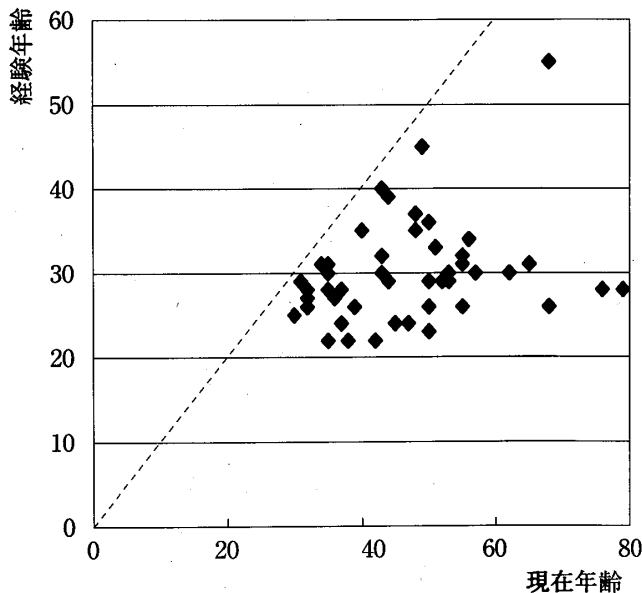
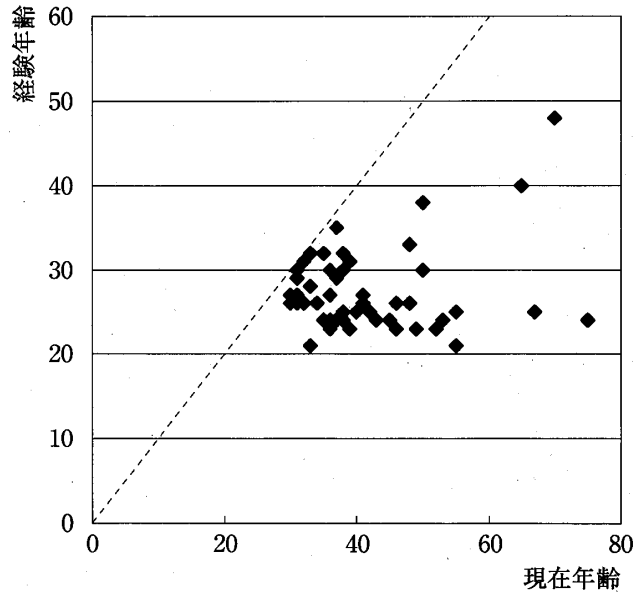


図2b 思い出の持続 結婚 女性 n=52



4) 他にこのような強い思い出としての持続を示すものに、「子の誕生」や「戦争体験」がある。前者は、結婚と同じく良き思い出である。一方、「戦争体験」はある世代以上に固有の体験である。しかし、「若いときの親の死」と同様に、通常のライフコースでは想定されていない出来事であり、さまざまな対処を要請するのである [高橋・岸野 2001: 58].

図3a 思い出の持続 親の死 男性 n=41

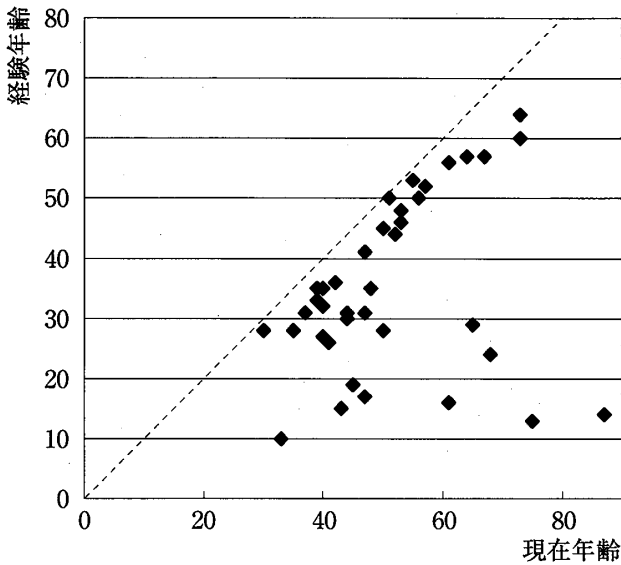
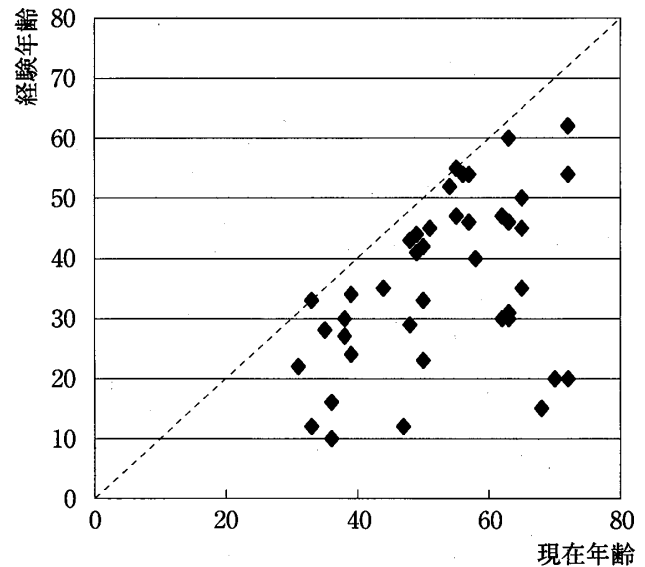


図3b 思い出の持続 親の死 女性 n=42



II-2 思い出の置き換わり

前節で見たような、例えば中高年期の「親の死」などの思い出の持続について、なぜ男女差が現れるのだろうか？ 経験時の年齢差はあるとしても、「親の死」の経験率そのものに差があるとは考えられない。ここでは考えられる可能性は以下の二つである。

- 1) 他により強い影響を持った出来事に出会ったために、それと置き換わったこと。
- 2) 出来事への感度に差があること。

1) の強い思い出の置き換わりについては、現在年齢別に出来事の回答傾向を見ることで推測が可能となる。

図4a からは、男性にとって「親の死」に置き換わりうる出来事経験は「職業・仕事」であることが理解される。「職業・仕事」については経験率そのものに差があるので、1) の可能性が高いことが推測される。一方、図4bc からは、女性において「親の死」以外にも回答される家族の出来事は少なくなく、こうした出来事に対して感度が高いことが示唆される（但し、男女において年代別経験率の差が高いと思われる「配偶者の死」は除く）

この思い出の置き換わりを、子の出来事全体について見たのが図5ab である。「子の誕生」「子の結婚」といった節目となるような出来事については男女共通した傾向を示す。ところが、男性の場合、それ以外の「子のこと」一般になると回答率が下がるのに対し、女性の場合は高く「子のこと」全般への関心が（具体的な中身は置き換わったとしても）一貫して持続している。この傾向からは、2) の可能性が示唆される。

しかし、97年調査のデータだけでは、この男女差が自伝的記憶形成のどの段階で現れ

図4a 思い出の置き換わり 男性

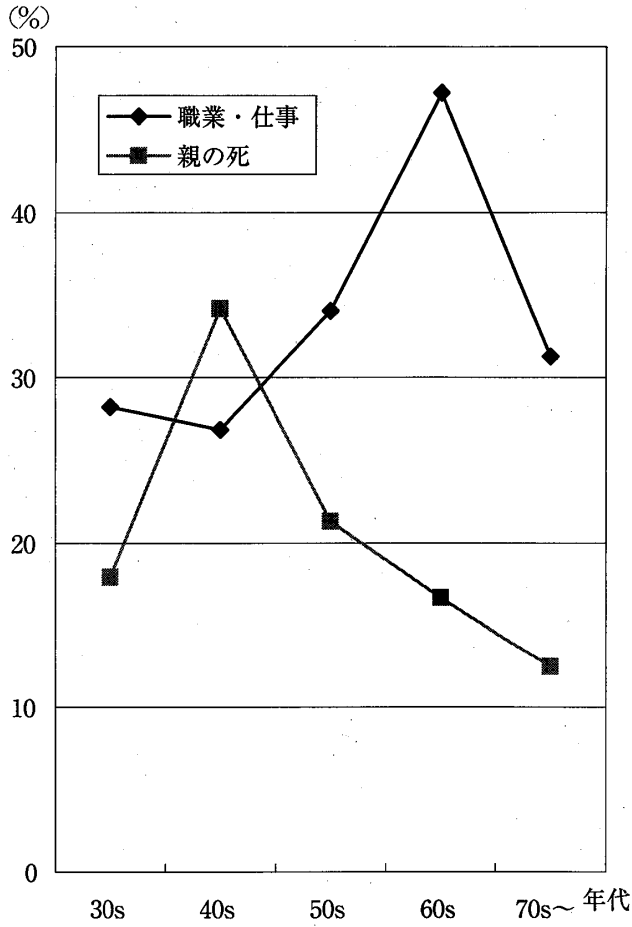


図4b 思い出の置き換わり 女性1

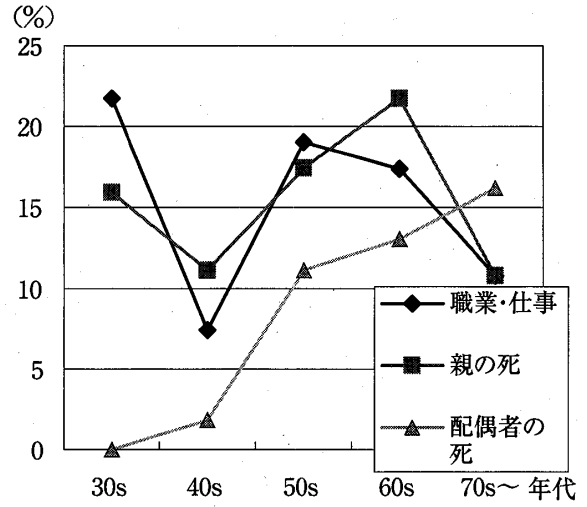


図4c 思い出の置き換わり 女性2

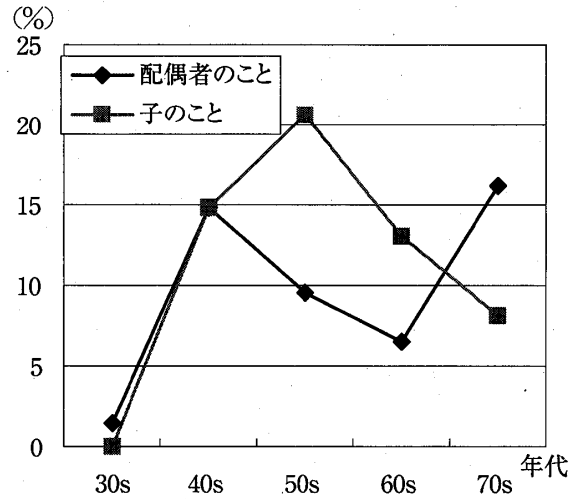


図5a 子の出来事への関心 男性

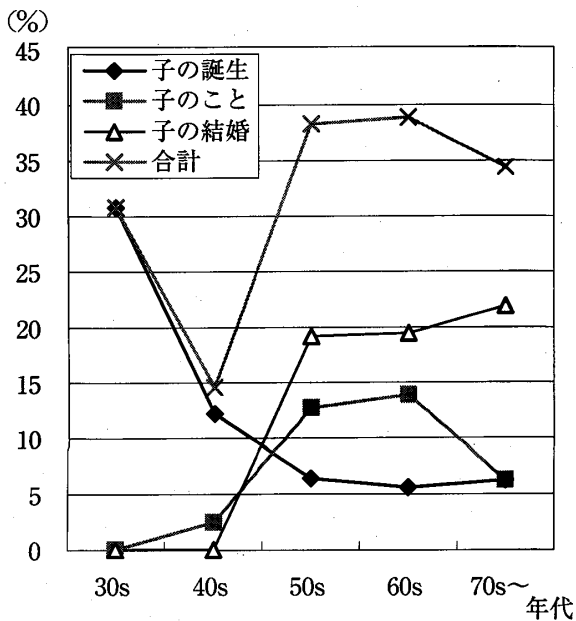
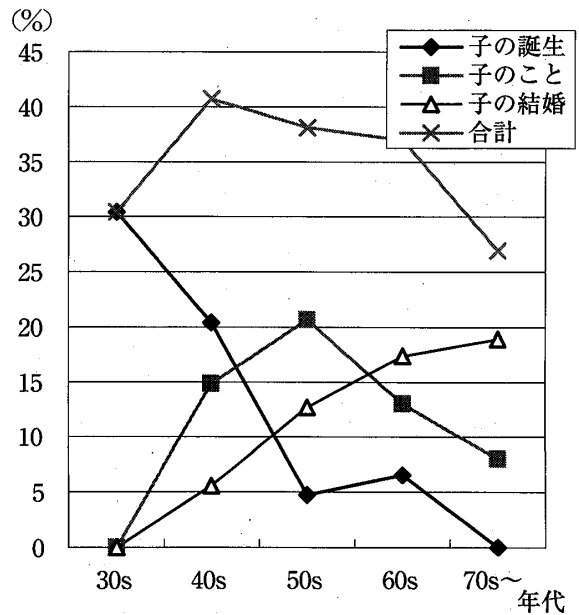


図5b 子の出来事への関心 女性



るのは分からないので、この二つのどちらが優勢なのかについて確定的なことは言えない。以下で節を改め、98年調査のデータと対照させながら考察してみたい。

II-3 自伝的記憶の候補——「どのような出来事が自伝的記憶になりうるのか」

前節まででみた自伝的記憶についての男女差は、最初の経験時からのものなのか、それともその後の形成の段階で現れるものなのであろうか。98年調査での抑うつ度得点の差を見ることで、経験率の差にかかわらず、出来事への感度の差を近似的に把握することが出来る。

図6ab, 図7ab が「良かった」「悪かった」出来事それぞれの男女別の上位である。「職業・仕事」については明らかな男女差が見られる。他には、「悪かった」では「病気・事故」(男性10%<女性15%)、「良かった」では「孫のこと」(男性9%<女性16%)の差が顕著である。一見、男女での順位がだいぶ違うように見えるが、「悪かった」での「子のこと」(男性4%<女性6%)のように、回答率にはそう大きな差はない。自伝的記憶の

図6a 一年間で一番良かった出来事上位 (男性)

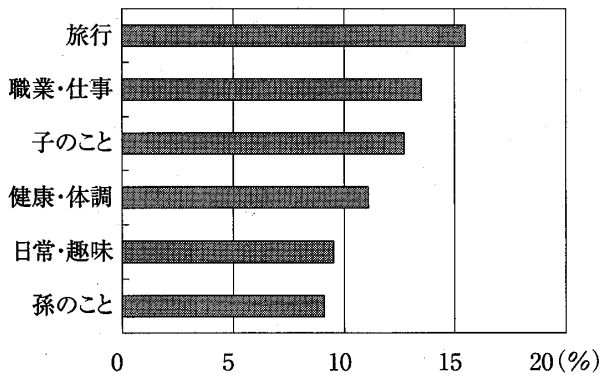


図6b 一年間で一番良かった出来事上位 (女性)

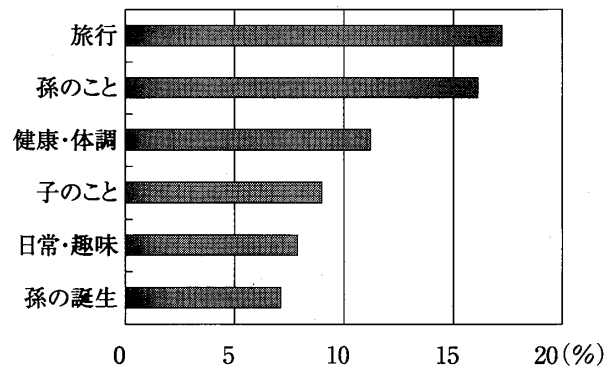


図7a 一年間で一番悪かった出来事上位 (男性)

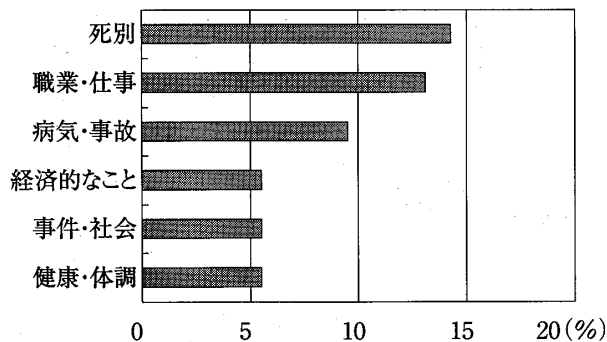
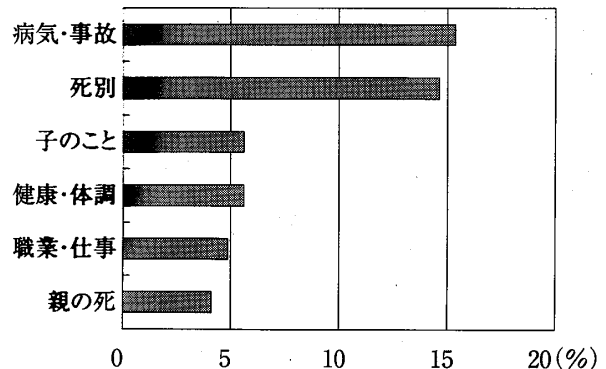


図7b 一年間で一番悪かった出来事上位 (女性)



候補としての出来事経験で、男女差のあるものは限られている。

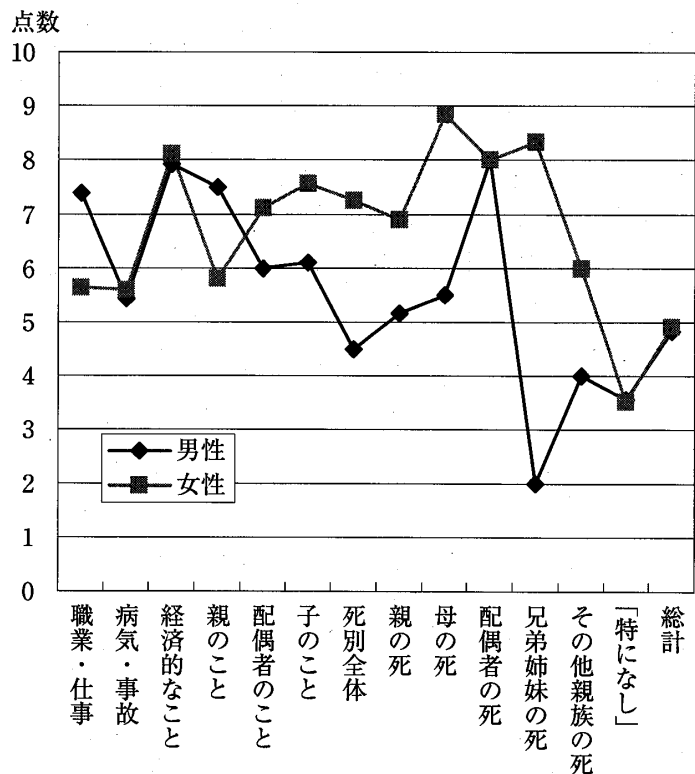
但し、「職業・仕事」が他の出来事に比べより強い影響力を与える出来事であるとしたら、この「職業・仕事」の回答の男女差はII-2で見た思い出の置き換わりにおいて大きく効いてくることが指摘できる。一方、98年調査と97年調査とのデータを対照させたとき、家族の出来事についての回答についてさほど大きな差は無い。このことから、その後の自伝的記憶の形成中に、男性の場合、家族の出来事が他のものに置き換えられていくことが推測される。ここでも、より強い影響を与える出来事（この場合主に「職業・仕事」）の経験率の差が説明力を持つ。

しかし、出来事経験の割合にかかわらず、持続している出来事経験時の影響が異なっていれば「感度の差」の影響が考えられる。このことを、98年調査の日常的な抑うつ度を測る項目（CES-D）の平均得点から見てみる。⁵⁾

回答された「悪かった出来事」（主なものに限った）別に、男女のCES-Dの平均得点の差を見たのが図8である。経験率に差のある「職業・仕事」については男性の方が高く、精神的な影響も受けやすいことがうかがえる。これに対し、ほぼ男女の経験率が均衡していた「配偶者のこと」「子のこと」「孫のこと」は総じて女性の方が高い（但し、「親のこと」は男性のほうが高い）。また、死別については、その回答率はほとんど変わらないが「配偶者の死」を除いては、総じて女性の方が平均得点は高くなっている。

男性は、「職業・仕事」について経験率が高いだけでなく、感度そのものも高く、女性は「家族の出来事」全般について感度が高いことが指摘される。このことは、

図8 出来事経験とCESD得点の男女比



5) もちろん、この抑うつが出来事による影響だけには限らない。しかし、出来事経験の回答の有無がCES-Dの得点と深く関連していることは興味深い。CES-Dの平均得点が最も高いのが、「悪かった出来事」を回答し「良かった出来事」は「特になし」とした集団であり、その逆は最も平均点が低かった。双方記入している集団と双方とも「特になし」を記入している集団はその中間にあり、ほぼ全体の平均点に近い。男女差はほとんどない。[高橋2002]

先に見た 97 年調査のデータにおけるそれぞれの出来事についての男女の感度の差と整合する。すなわち、自伝的記憶の様相と形成を枠付けているのは、男性においては「職業・仕事」出来事を軸にした経験率と感度の高さであり、女性においては「家族の出来事」を軸にした出来事経験への感度の差であることが了解されよう。

II-4 考察——「どのように自伝的記憶は形成されるのか？」

以上のライフイベント調査データの分析から、「自伝的記憶」の様相と形成について以下のような指摘ができる。

1) 自伝的記憶となっているのは、たいていの人が出会うような人生の節目となるような出来事経験であること。これは男女に共通する。全く個々ばらばらな回答があるわけではない。但し、「人生らしい」出来事が取捨選択されて記憶化されるのか、こうした質問に際して、回答に値し得るような出来事が選ばれるのか、といった可能性をはらむものでもある。

2) 出来事の経験率の差が、そのまま自伝的記憶にも反映されること。その典型は、「職業・仕事」である。就業率の男女差が、そのまま自伝的記憶にも反映されている、と見ることが出来る。

3) 出来事経験への「感度」に差が存在すること。この典型は家族の出来事一般について見られる。本来、経験率に男女差が見られないような出来事であるにもかかわらず、自伝的記憶においても、経験時の影響の受け方においても、男女差が明瞭に見られた。今回のデータでは十分に確認できないが、2) も経験率だけではなく、職業・仕事への感度が違う(=他の出来事に対して優位に位置づける)という可能性もあることになる。

以上の考察から、自伝的記憶の形成には、基本的な部分の共通性を持ちつつ、理念型として大きく二つの枠組モデルの存在が指摘できる。

A) 職業・仕事を軸とした自伝的記憶形成モデル

B) 家族・身近な者への配慮を軸とする自伝的記憶形成モデル。

それぞれは、単に思い出の作りあげ方が違うだけではなく、その出来事経験の蓄積も異なってくるわけで、自ずと言動に差が現れていくものと考えられる。

現状では、このタイプは性別と重なってはいる。しかし、その要因は単に「性差」とはいえない。先に見たように、その要因は経験率や感度などが相互作用し複雑である。現状でたまたま男女それぞれの性に多い枠組みモデルに過ぎないと見るべきだ。なぜならば、一個人の人生の中でもこの枠組みモデルが変化しうるからである。98年調査では、男性でも 80 代になると、出来事の回答や影響の受け方が他の年代と異なってくる。「A→B」

へという加齢による枠組みモデルの変更の可能性が指摘できる。

III. むすびに——人生分析における今後の課題

本稿の課題は、ライフイベント調査のデータにもとづいた自伝的記憶の様相及び形成についての分析と考察であった。その中で、自伝的記憶の形成には二つの枠組みモデルがあることを指摘することができた。

A) 職業・仕事を軸とした自伝的記憶形成モデル

B) 家族・身近な者への配慮を軸とする自伝的記憶形成モデル。

自伝的記憶とは、表面上の差異だけではなく、このような形成の過程そのものも異なっているのである。それゆえ、記憶を固定的なものではなく、動的なものとして見るのは不可欠な視点である。

こうしたモデルを示すことが出来たのは、単に自伝的記憶についての調査データではなく、広義のライフイベント調査のデータを使って、その形成にまで視点を広げたからである。本来であれば本稿のような横断調査は、繰り返し実施することではじめてその意義が出てくるものである。しかし、本稿では次善の方法として相異なる視点から行われたライフイベント調査のデータを組み合わせることでこれを補った。社会調査の困難が指摘される現在、今後模索すべき「2次分析」の一つの方向性であろう。それでも、横断調査ゆえの限界は残る。もし、女性の就業率が男性並みに上がった場合、この男女差がどのように変わるだろうか。そこまで見ることで、出来事の経験率と出来事経験への感度との関係がよりよく理解されるだろう。

さて、考察でも見たように、総じて見ると自伝的記憶全体での枠組みの共通性は高く、安定しているように見える。しかし、これは量的調査の限界も意味してはいまいか。安定的に見えるのは、質問紙に回答された出来事経験という、うつろいゆく記憶の一瞬を捉えたに過ぎないからかもしれないのである。また、個々人の出来事経験の「少数例」については、個別過ぎるので分析の対象にはなかなかはいりにくい。それだけに、この少数例についてどのようにアプローチして、自伝的記憶の動態を把握していくのかが今後の課題になる。

例えば、全体では少数例でも「戦争体験」のようなある世代に共通して体験した出来事経験はある程度分析が可能である。一方、97年調査には見られた「子の死」といった出来事経験は、その精神的な影響の大きさに比べ、期限を短期に限った量的調査では観察し

づらい（98年調査には見られない。「孫の死」が1例のみ）。

また、外枠を考えるために、「自伝的記憶としてとりあげるに値する」ものではない出来事経験の行方を見ていく必要がある。その典型として、98年調査の大量の回答数に比べ、97年調査では極めて少数であった「旅行」が挙げられる。98年調査のデータ（個々の回答の記述）からでも、「旅行」という出来事経験は、単に「どこへ」行った、という非日常への欲求からだけではなく、「だれと行ったか」や「健康で行くことができた」という、日常的な欲求の延長にあることが分かる。「会うこと」や「健康」と近接する出来事経験でもあるのだ。一方、「ペットの死」も、回答数は少ないが、98年調査には回答され（9件）、97年調査にはない出来事経験である。「ペットロス」などとして社会に広く認知されることで、「身近なものとの別離」の延長として重要な出来事として認知されていく可能性がある。

他に、既に一定数で回答が出るが、出来事の位置づけが変更される場合もある。97年調査での「離婚」を見ていくと、サンプル数は限られるが「どのような影響を受けたか」について意味づけが男女でだいぶ異なる。女性では「精神的に豊かになった」と回答する人が上回っているのだ（[高橋2002]より）。ここからだけでは、経年変化としてみなすことは出来ないにしても、ひとつの方向性を想像させる。

参考文献

- ハレーブ、K・タマラ（正岡寛司監訳）（2001）『家族時間と産業時間』早稲田大学出版会。
岸野洋久（1999）『生のデータを料理する』日本評論社。
正岡寛司（1996）「ライフコース研究の課題」『ライフコースの社会学』岩波書店、189-221頁。
中野卓（1981）「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』32(1): 2-12。
Radloff, Lenore Sawyer (1977), "The CES-D Scale: A Self-Report Depression Scale for Research in the General Population" *"Applied Psychological Measurement"* vol 1(3), PP. 385-401.
佐藤浩一（2001）「自伝的記憶」森敏昭編著『認知心理学を語る1 おもしろ記憶のラボラトリー』北大路書房、15-36頁。
下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・石原治・権藤恭之（1995）「中高年期におけるライフイベントとその影響に関する心理学的研究」『老年社会科学』第17巻第1号、40-56頁。
高橋正樹・岸野洋久（2001）「思い出の持続と置き換わり——ライフイベント分析からの試み——」『理論と方法』（数理社会学会）16巻1号：47-60。
高橋正樹（2002）「ライフイベント研究の可能性と課題」第50回関東社会学会（2002年6月）報告レジュメ。
矢富直実・Jersey Liang・Neal Krause・Hiroko Akiyama（1993）「CES-Dによる日本老人のうつ症状の測定——その因子構造における文化差の検討——」『社会老年学』No.37、37-47。

付記

本論文で扱ったライフイベントの調査データについて、私家版ではあるが報告書をまとめた（『ライフイベント調査報告書 97・98年度目黒調査より』2002年9月）。また、本論文の投稿（2002年8月）後、論旨に深く関わる著作が刊行された。生物学から記憶の意義をさぐった『心の起源』（木下清一郎、中公新書）と、『記憶の持続

特集 コンピュータとネットワーク時代の社会科学

自己の持続』(松島恵介, 金子書房)である。残念ながら本稿では, この成果を本文に反映させることはできなかった。